

修士論文(要旨)

2017 年 1 月

攻撃行動に対する表出形態を考慮した心理的ストレスと攻撃性の関連

指導 小関俊祐 先生

心理学研究科
臨床心理学専攻

215J4010

立花 美紀

Master's Thesis (Abstract)
January 2017

The Relationship between Psychological Stressors and Aggression, with Reference to the
Form in which Aggressive Behavior is Expressed

Miki Tachibana
215J4010
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Shunsuke Koseki

目 次

1. 問題と目的	1
2. 研究 1	1
3. 研究 2	1
3.1 調査対象者	1
3.2 調査材料	1
3.3 結果と考察	1
4. 総合考察	2

引用文献

1. 問題と目的

いじめ防止対策推進法(文部科学省, 2016)によると,「いじめ」を,「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものも含む。)であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義している。現在,いじめの問題に対して予防的なアプローチを行う必要性が問われている。特に,いじめの問題を扱う際に,一次予防的アプローチを提供していくことが,今後必要であると考えられている。また,近年,いじめを予防するという観点から,いじめの問題と攻撃行動との関連が指摘されている(勝間ら, 2011)。本修士論文においては,攻撃行動の一次予防方略の立案のための介入実施における操作変数の同定をすることを目的とする。

2. 研究1 攻撃行動に対する一次予防的介入に関する展望

研究1では,中学生を対象とした攻撃行動に対する一次予防的介入を行っている実践研究を展望し,その課題と改善点について明らかにした。その結果,攻撃行動の一次予防を目的とした介入手続きを整理すると,①いじめや心理的ストレスに対する理解を目的とした心理教育,②攻撃行動の先行刺激として位置付けられる心理的ストレス反応の低減を目的としたリラクセーションや自己教示訓練,アンガーマネジメント,リフレーミング,コラージュなど,③対人関係の円滑化を目的とした SST やアサーショントレーニング,コミュニケーショントレーニングなどの,3つの要素に整理することができた。

3. 研究2 攻撃行動に対する表出形態別の心理的ストレスと攻撃性に関する調査

研究2では,高校生における攻撃行動に対する表出形態ごとの攻撃性に影響を与える心理的要因の差異について明らかにした。

3.1 調査対象者

関東圏の女子高等学校に在籍する高校1年生 167 名と東北地方の高等学校に在籍する高校1年生 215 名, 382 名(男性 48 名, 女性 331 名, 不明 3 名)を対象に調査を行った。

3.2 調査材料

- ①中学生の日常生活調査票第2版 11 項目:安藤(2007)によって作成されたいじめを行った経験といじめを受けた経験を評価する尺度として加害群と被害群の2種類を用いた。
- ②ストレス評価尺度 25 項目:菅・上地(1996)によって作成された普段の学校生活での出来事に関して,「経験の度合い」と「どう感じたか」についてそれぞれ記述するように求めた。
- ③日本語版 Buss-Perry 攻撃性調査用紙(以下,BAQ)24 項目:攻撃性に関する内容を5段階の評定で求めた。

3.3 結果と考察

群設定の妥当性の検討を行うために,表出形態3群(いじめ加害群,いじめ被害群,いじめ中立群)および地域2群(関東,東北)を独立変数,いじめ関与の経験の被害経験得点と加害経験得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果,本研究における群の設定手続きが妥当であったことが確認された。加えて,地域の群による攻撃行動に対する表出形態の群の程度に差がないことが確認された。このことから,以降の分析では地域の差異は考慮せずに攻撃行動に対する表出形態について分析を行った。

攻撃行動に対する表出形態別に心理的ストレスが攻撃性に与える影響を検討することを目的として、多母集団の同時重回帰分析を行った。

その結果、いじめ加害群において「身体的攻撃行動」は、「校則・規則」、「友人との関係」、「友人との関係」において低い正の相関が認められた。このことから、「友人との関係」に関するストレスから「身体的攻撃行動」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。「敵意」は、「友人との関係」において有意な正の相関が認められた。このことから、「友人との関係」に関するストレスから「敵意」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。「短気」は、「友人との関係」において有意な正の相関が認められた。このことから、「友人との関係」に関するストレスから「短気」には有意な正の標準化偏回帰係数を示した。いじめ被害群において、「身体的攻撃行動」は、「友人との関係」において有意な低い正の相関が認められた。このことから、「友人との関係」に関するストレスから「身体的攻撃行動」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。「敵意」は、「友人との関係」において有意な正の相関が認められた。このことから、「友人との関係」に関するストレスから「敵意」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。「短気」は、「友人との関係」において有意な正の相関が認められた。このことから、「友人との関係」に関するストレスから「短気」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。以上のことから、いじめに対して加害を行う者や被害に遭う者は「友人との関係」に関するストレスから攻撃性を表出する可能性が示唆された。

いじめ中立群において、「身体的攻撃行動」は、「校則・規則」、「友人との関係」において有意な低い正の相関が認められた。このことから、「校則・規則」、「友人との関係」に関するストレスから「身体的攻撃行動」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。「敵意」は、「校則・規則」、「友人との関係」において有意な低い正の相関が認められた。このことから、「校則・規則」、「友人との関係」に関するストレスから「敵意」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。「短気」は、「学業・進路」において有意な低い正の相関が認められ、「友人との関係」において有意な正の相関が認められた。このことから、「学業・進路」、「友人との関係」に関するストレスから「短気」に対して有意な正の標準化偏回帰係数を示した。以上のことから、いじめに対して中立な立場を保っている者ほど学校生活でのストレスを抱えやすく、攻撃性を表出させやすい可能性が示唆された。

3.4 総合考察

本研究の結果から、いじめ加害群といじめ被害群の者に対して「友人との関係」に関するストレスを操作することを目的とした SST やストレスマネジメント、認知的再体制化などの手続きを踏んだ心理的介入が必要になると考えられる。たとえば、友人との上手な付き合い方を学ぶことを目的とした SST やストレスの仕組みについて学び、リラクセーションを実施するストレスマネジメントなどの手続きを組み込んだ心理的介入が必要になると考えられる。また、いじめ中立群の者に対して「友人との関係」、「校則・規則」、「学業・進路」に関するストレスを操作することを目的とした SST や問題解決訓練、コーピングの拡充などの手続きを踏んだ心理的介入が必要になると考えられる。たとえば、いじめ中立群の者に対してはいじめ場面における仲裁的行動がとれるような問題解決訓練を取り入れた心理的介入が必要になると考えられる。

引用文献

- 安藤 明人・坂井 明子・島井 哲志・嶋田 洋徳・大芦 治・曾我 祥子・宇津木 成介・山崎 勝之
(1999). 日本語版 Buss-Perry 攻撃性調査用紙(BAQ)の作成と妥当性,信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- 安藤 美華代 (2007). 中学生における問題行動の要因と心理教育的介入 発行所 風間書房
- 勝間 理沙・津田 麻美・山崎 勝之 (2011). 学校におけるいじめ予防を目的としたユニバーサル
予防教育－教育目標の構成とそのエビデンス 鳴門教育大学研究紀要, 26, 171-185.
- 菅 徹・上地 安昭 (1996). 高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察 カウンセリング研究,
29, 197-207.
- 文部科学省 (2016). 「いじめ防止対策推進法」